ISSN 2758-8602

ちひろ美術館・東京
美術館だより

No.229
2026.7.10

武田美穂展　絵本づくりはドキドキなのだ！

●2026年7月25日(土)～10月25日(日)

主催：ちひろ美術館　　協力：ポプラ社、ほるぷ出版、理論社
後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

図１　『となりのせきのますだくん』(ポプラ社)より　1991年

図２　『ますだくんのランドセル』(ポプラ社)より　1995年

図３　『オムライス・ヘイ！』(ほるぷ出版)より　2012年

“ますだくん”や“ざわざわ森のがんこちゃん”シリーズで知られる絵本画家・武田美穂。「エンターテイメントに徹して」描いていきたいと語る武田は、読者である子どもたちを常に意識した絵本づくりを展開し続けています。本展では、1991年以降の仕事のなかから代表的な絵本の数々を紹介します。

『となりのせきのますだくん』

1991年に出版された『となりのせきのますだくん』は、今年、刊行35周年です。主人公の少女みほちゃんと、同じクラスの少年ますだくんが登場する絵本は全５作のシリーズとなりました。

１作目の『となりのせきのますだくん』(図１)では、ふたりの関係性がみほちゃんの視点で展開します。消しゴムのカスがはみ出すと椅子を蹴ったり、給食で嫌いなニンジンを残すと大きな声で先生に告げ口したり……。内気なみほちゃんにとって、ますだくんはまるで怪獣のよう。お気に入りの鉛筆を折られたことで、とうとう泣き出してしまいます。

この絵本は、映画監督で脚本家でもあった父親の影響から、映画の手法を取り入れてつくられました。ひとつの場面を枠線でくくる漫画のコマ割りのような描き方は、映画の絵コンテから発想を得たといいます。１頁に複数の場面が展開できるほか、線から体をはみ出すように描くことで、みほちゃんの目に映るますだくんの大きさを表したり、線の外に小さなみほちゃんを登場させて心情を語らせたり、枠線と周囲の余白を使って少女の心の世界を巧みに描き出しています。

「単純な線でも、心の動きをしっかり伝えたくて」、イメージに近づけるために何枚も描くこともあったというみほちゃんの表情もこの絵本の魅力のひとつです。

４年後に出版された『ますだくんのランドセル』(図２)では、ますだくんの視点でみほちゃんとの出会いが語られます。１頁内のコマの数を増やし、５人姉弟の三男で、やんちゃで不器用ながらも、世話好きでやさしいますだくんの性格を丁寧に描いています。「鬱陶しいくらいに絡んできても、実はいいやつだったり」する多面性も、描きたかったことのひとつだったと語っています。「放浪癖のある子だった」という画家自身の幼いころの体験をもとに描いた『ますだくんとまいごのみほちゃん』も展示し、“ますだくん”シリーズから３作品を出品します。

リズムとあそびとナンセンス！

「ナンセンスが好きなんです。つまり意味のない感じのもので笑えちゃう。笑いって自分のなかで大事」と語る武田の絵本は、リズミカルなことばや変化に富んだ場面展開で惹きつけ、読者を理屈抜きに楽しめる世界へと導きます。

武田が「自分のなかではある意味ナンセンス」という「たべもの絵本」シリーズもそのひとつ。編集者との会話から、「よだれが出ちゃうくらいおいしそうな絵本」をつくろうと始まった企画です。３作目の『オムライス・ヘイ！』(図３)は、具材を準備しオムライスが完成するまでの工程を描いた絵本です。「いためるぞ　へへイ！」とラップ調のリズムにのって調理が進みます。「単純な題材だからこそ、絵本の原点である、めくり・リズム・盛り上がりをわかりやすく見せられるんじゃないかって思った」と語っています。

最新作の『まるがかけたら』(図４)など、あそび心あふれる作品も出品します。

戦争と平和

武田は作家・那須正幹(なすまさもと)の文や遺稿に絵を描き絵本を制作しています。３歳のときに広島で被爆した那須は、戦争の記憶が薄れつつある現代を危惧し、その思いをことばにしました。『ねんどの神さま』(図５)は、戦争で家族を失った少年・健一が小学校の授業でつくったねんど細工の“戦争犯罪人をこらしめる神さま”が、50年後、巨大な怪物となり、兵器会社の社長になった健一のもとへとやってくる話です。戦争というテーマに、武田は手元にあったあらゆる画材を使い、それまでの絵本の画風とは違う重厚な表現で向き合いました。その33年後、那須が広島の被爆70年に合わせて依頼された合唱曲の歌詞をもとにした『やくそく』(図６)を手がけました。中学生のトオルは、自分のことを原爆で亡くなった兄と間違え始めた年老いた祖母に戸惑いながらも、祖母の笑顔を見て、「ぼくらはぜったい戦争なんかしない」と決意します。武田は、今を生きる私たちに“戦争と平和”について問いかけるこの作品を、過去の場面をセピアで、現在をカラーで描き分けわけて絵本にしました。人間の根源的なやさしさや思いを表現した「やさしい反戦」と語っています。

子どもの心をとらえ続ける武田美穂の絵本の世界をご覧ください。(宍倉恵美子)

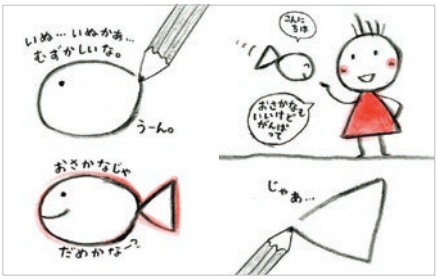

図４　『まるがかけたら』(理論社)より　2025年

図５　『ねんどの神さま』(ポプラ社)より　1992年

図６　『やくそく　ぼくらはぜったい戦争しない』(ポプラ社)より　2025年

ちひろ　子どもは平和のシンボル

●2026年7月25日(土)～10月25日(日)

主催：ちひろ美術館
後援：日本子どもを守る会

図１　大きな虹と子どもたちと働く人々　1960年代前半

子ども、花、鳩、平和のシンボル

ちひろ美術館の初代館長を務め、劇作家でもあった飯沢匡（ただす）（1909～1994）は、ちひろの没後20年に刊行された画集に、「子どもは平和のシンボル」という文章を寄稿しました。そこで彼はちひろの人生や画業の変遷にふれた後、こう結んでいます。「ちひろが子どもの姿を描き続けたのは、子どもが『平和』のシンボルに他ならないからだと私は思う。人々がちひろの作品を今日もなお愛さずにはおかぬのもまさにその心であろう。」

飯沢も記しているように、ちひろは若いころの戦争体験や敗戦を経て平和の尊さを深く感じ、それを新たな出発として、画家への道を歩み始めました。愛する子どもたちの姿を描くことで、ことばはなくても、絵から彼女の想いは見るものに伝わってきます。

子どもたちのほかにも平和のシンボルといえる花、虹、鳩などが描かれ、平和そのものの世界がちひろの作品にはあります（図１・２）。

図２　鳩と少年　1965年

「子どものしあわせ」

ちひろの作品を、多くの人たちに届けたもののひとつに、月刊誌「子どものしあわせ」の表紙絵があります。この雑誌は、1952年に結成された日本子どもを守る会が1956年から発行した、「父母と教師を結ぶ教育雑誌」でした。

日本子どもを守る会は文学者や教育者など文化人53名と20の団体の賛同を得て結成し、初代会長は「原爆の子」の編さんで知られる長田新です。会の設立の背景には戦後の子どもたちの困難な状況に加え、1950年の第１回国際子どもデーや、1951年に制定された児童憲章などの動きがありました。「花には太陽を　子どもには平和を」のスローガンで、さまざまな活動が全国で行われていきます。

「子どものしあわせ」の初代編集責任者であった羽仁説子は、「しじゅうデモにも出られない私たちにとって、雑誌は月ごとに子どものしあわせを祈って進むデモの列とみられないでしょうか」と語っています。創刊号から８号までは表紙にピカソやローランサンが子どもを描いた作品が使われ、その後には子どもたちによる版画作品、画家・五百住乙人（いおずみきのと）の描いた子どもの作品を経て、1963年３月号から、ちひろが表紙絵を手がけています。ちひろは1974年に亡くなるまで12年間表紙を描き、付録の絵葉書の絵にも起用されるなど、読者たちの目と心に残りました（図３）。

図３　貝がらと少女　1971年

母と子の姿

平和を表現するために、芸術家たちは母子像をモチーフに選ぶことがあります。どの子どもも母から生まれ、その子どもを守りたいという想いは、平和を希求する想いとつながるからでしょう。

ちひろの描いた母子像を見ると、まず母親と子どもの表情が目に入りますが、多くの作品には、子どもを抱いたり支えたりする、母親の手や指が描かれていることに気づかされます。ちひろが、自分の子どもを「さわって育てた」と語っていることばを想起させます。

1955年の、雑誌社からのアンケートで、どんな気持ちで絵を描いているかという問いの答えに、ちひろは「いまの私の願いは、すべての母親と同じように、戦争のない、平和な、ゆたかな世の中で、子どもたちをしあわせに大きくしてやりたいということです。」と記しています。ちひろが絵を描きながら育てた、ひとり息子・猛の姿が絵のなかの子どもと重なります（図４）。

図４　夏の母と子　1960年代前半

子どもたちからまなぶ

「子どもの心は、どこの国でも同じ」と語っていたちひろが文も絵も手がけた絵本の主人公は、子どもたちです。

『となりにきたこ』（至光社）では、少女が引越してきた少年と、最初は距離をおきながら、いっしょに遊ぶうちに仲良くなっていきます。途中で母親が少しだけ登場しますが、あくまでも脇役。ふたりの子どもたちの会話と、少女の心のなかの声、ナレーションが交互にテンポよくあらわれます。

出会って間もないころにはそっぽを向いていたふたりが、しばらくしてお互いに向き合い、そして最後の頁では並んでらくがきをしている場面で終わります。（図５）

図５　『となりにきたこ』（至光社）より　1971年

大人は、だれでも子どもであった時期があります。子どもの心を思い出し、子どもたちから学ぶことが、平和への鍵のひとつかもしれません。ちひろの描く子どもたちが、そのようなきっかけとなれば幸いです。　（松方路子）

生誕120年『てぶくろ』の画家ラチョフと民話絵本の世界　関連イベント

2026年４月11日（土）講演会　ラチョフと絵本『てぶくろ』の魅力

講師：松本猛（美術・絵本評論家、作家、ちひろ美術館常任顧問、横浜美術大学客員教授）

2026年４月29日（水・祝）ロシア語で味わう民話絵本と、キリル文字の魅力

講師：フョードロヴァ・スヴェトラーナ（ロシア西シベリアのクルガン出身、東京ロシア語学院ほか非常勤講師）

ラチョフ展に関連して開催したふたつのイベントについて、一部を紹介します。（宗像仁美）

講演会　ラチョフと絵本『てぶくろ』の魅力

松本：僕がラチョフについてまとめて話すのは、おそらく初めてかと思います。最近の絵本は32頁のものが多いのですが、『てぶくろ』はたったの16頁。限られた頁数でありながら、これだけの力をもって現代まで読み継がれているのはなぜか、お話したいと思います。

『てぶくろ』がソ連で出版されたのは、僕が生まれたのと同年の1951年。既に冷戦下にあり、おそらくアメリカ文化の影響はあまりない時代だったでしょうが、『てぶくろ』はとてもおもしろくつくられています。くわしく見てみましょう。まず、最初の３場面で、手袋のまわりをぐるりと一周し、３次元の空間を読者に意識させます。この映像的な感覚は、映画から得たものではないかと思います。ソ連では映画がものすごく盛んでした。「戦艦ポチョムキン」の監督エイゼンシュタインは、映画のモンタージュ理論を構築した人です。おそらくラチョフは、こうした映画表現にふれていたのではないでしょうか。次に、うさぎ、きつねと動物が登場しますが、手袋の向きが逆転しています。絵本は左開きのため、右へ目線が流れていきますが、立ち止まらせたいときには左を重くするという方法があります。ここでは、きつねをじっくり見せたいということでしょう。

エフゲーニー・ラチョフ
『てぶくろ』（福音館書店）より　1950年

さらにこの場面から、手袋が家らしくなり、動物との大小の違いが気にならなくなります。周囲の木々の大きさは変わっていませんので、手袋の大きさはそのまま。つまり、動物が小さくなっているんですね。絵本の最後は、冒頭と同じく、手袋だけが描かれ、くまが手袋に入る場面はありません。16頁のなかに収められなかったのでしょうか？　僕はあえて描かなかったのだと思います。小さくなって手袋に入り込んだ動物たちが、どんなふうに出てくるのだろうという一番おもしろい場面は、読者の想像に任せている。これがこの絵本のすごいところです。安野光雅さんが「ふしぎなことっていうのは、絵がリアルじゃなきゃ伝わらないんだよ」という話をしてくれたことがありました。『てぶくろ』の動物は服を着ていますが写実的で、手袋が家になっていく描写も細かい。ただ物語だけがものすごくファンタジーなんです。だから絵本として効果的なのだと思います。

1991年、ソ連崩壊の直前に、僕はモスクワへ入りました。ラチョフが住んでいたのは、手で扉を開けるエレベーターのある立派なアパートでした。夫妻は最初、大きなタブローばかり見せてくれましたが、絵本の原画はないのかとしつこく尋ねると、部屋の奥から、紙をぐしゃぐしゃに突っ込んだ段ボール箱が出てきました。一枚一枚広げて見ていくと、『てぶくろ』の原画が出てきました。

エフゲーニー・ラチョフ
モスクワの自宅にて　1991年

絵本と比べるとわかりますが、原画は本当に美しいです。動物の毛並みの細やかなタッチや、民族衣装の繊細な色づかいなど、ぜひ原画で確かめてください。

ロシア語で味わう民話絵本と、キリル文字の魅力

スヴェトラーナ：ラチョフの『つぼのおうち』とマーヴリナの『メルヘン・アルファベット』についてお話します。

中世ロシアでは、お金持ちのお屋敷や御殿などを「Терем（テーレム）」と呼んでいました。これに、小さいものやかわいいものの名詞の後ろにつける接尾辞（−ок）をつけて、「Теремок（テレモーク）」といいます。「つぼのおうち」と訳されているのは、А. トルストイの再話によりますが、手袋やうまの頭蓋骨など、さまざまなバージョンがあります。この物語は、ことばの音とリズムに基づいており、小さな子どもはこれを子守唄のように受け止め、周囲の世界に親しむきっかけとなります。では、ロシア語で読んでみましょう。まず登場するмуха−горюха：蠅（はえ）のガリューハは、「ムーハ・ガリューハ」と韻を踏んでいます。続

いてкомар−пискун：蚊のピスクン。ロシアでは蚊の羽音を「ピー」とあらわすため、ピスクンという名前なんですね。мышка−погрызуха：ねずみのパグルィズーハは、ガリガリかじるねずみ、лягушка−квакушка：かえるのクヴァクーシュカは、クワックワという鳴き声を意味しています。動物の名乗りと返答が、韻を踏んでリズミカルに繰り返されていることが、ロシア語で読むとよくわかります。

続いて、マーヴリナの『Сказочная азбука：メルヘン・アルファベット』です。Азбука（アーズブカ）とは、子どもが最初にアルファベットを学ぶ本のことです。ロシア語の33のアルファベットをおとぎ話で紹介する、ロシアのおとぎ話の百科事典であり、プーシキンの叙事詩「ルコモリエ」を連想させます。ロシア民話の世界感が凝縮された「ルコモリエ」の世界へ、子どもたちを案内する本といえるでしょう。この本の文字は、ロシアの伝統的な手書き文字の書体、ポルウスターフ風に書かれています。マーヴリナは、伝統的な書体をよく研究し、さらに、もともとは速く書くための書体だったポルウスターフを芸術的に美しく書く工夫を凝らしています。

Щ（シュ）のページには「Щука（シューカ）：カマス」が描かれています。「По щучьему велению：カマスの命令により（何々をしろ！）」という魔法の呪文は、ロシアではだれもが知っています。私も、子どもがカマスを食べたがらなかったときに、「食べれば願い事が叶うよ」といったところ、真剣な顔をして食べてくれたことがありました。本当に魔法の呪文のようですね。

タチヤーナ・マーヴリナ　Щのおはなし
『メルヘン・アルファベット』より　1964年

ひとこと ふたこと みこと

3月29日（日）
姉といっしょに東京旅行、神保町でちひろの絵本を買い、ぶらぶらとここの美術館まで来た。愛らしくて美しい絵本のお話と絵に驚き、ちひろや他の作家の絵本たちにたくさんの愛情と共感を感じ、色々学んでちひろのファンになって帰ります。連れてきてくれたお姉ちゃんありがとう。（原文は韓国語）

4月11日（土）
ラチョフの作品を全部見られるのは34年ぶりです。前回は1992年5月のGW。あのときは、ベルリンの壁の崩壊、ドイツの統一、アパルトヘイトの廃止など良い方向にむかうのだと思っていました。最近の穏やかでない世の中を見ていると僕自身どうかなりそうです。日本も世界も変な方向にむかっていくようです。こうしてこの美術館にいられる時だけ落ち着いていられます。僕ももう70近くになりますが、今日ここで味わった安らぎを心の支えにしたいです。

5月16日（土）
このすばらしい美術館に初めて来ました。以前訪れた友人からのお勧めで。日本語は全然読めませんが、展示されているすべての絵を心から楽しみました。画家たちからのメッセージを心で感じとることができました。素敵な作品たち！学芸員さんと美術館を運営する方々に感謝です。
タイ・バンコクより来たKay（原文は英語）

5月21日（木）
建築家・内藤廣先生の建築を学ぶ息子といわさきちひろさんの絵が大好きな母。母と子ふたりで楽しめる素敵な美術館で幸せな気持ちになりました。ありがとうございました。

5月23日（土）
とても素敵な場所に感動しました。のんびりと美しいお庭にいやされ。また訪れたいです。　ゆみ

6月7日（日）
約35年前、学生のころに来て以来の訪問。そのときいっしょに来た友人たちと来ました。館内は美術館らしく回りやすくなっていましたが、ちひろさんの大切なものは以前と同じように心のなかまで伝わってきました。子どもだった私が母になり、違った目線でひとつひとつの作品を味わうことができました。また大切な思い出ができました。ありがとう。　住

美術館日記

4月29日（水）☼
ゴールデンウイーク初日。絵本カフェでは、新メニューのホットケーキを注文される方が多い。さわやかな青空の下、中庭のテラス席を利用される方も。ホットケーキの甘い香りに、スタッフも食欲をそそられる。

5月3日（日）☁
今日は、憲法記念日。受付で配布している憲法カード（「前文」・「9条」）を手にとる方も多く見られた。未来に生きる子どもたちの幸せのために、憲法について、いっしょに考えていただくきっかけになれば、うれしい。

5月7日（木）☼／☁
ちひろの庭のバラが見ごろを迎えている。とくに、パーゴラの白バラ（アイスバーグ）は、たくさんのつぼみをつけて華やかに咲き、来館者の目を楽しませている。

5月15日（金）☁／☼
初夏の展覧会が開幕。いわさきちひろ「とても素朴なんだけれどたいせつなもの、それが絵本の中にはあるんです。」展では、ちひろが遺したことばが、作品とともにパネルで展示されている。また、美術館では今年、ちひろのことばを収録した目録の刊行も予定している。作家研究を深める上で貴重な資料となることが期待され、その完成が待ち望まれる。

5月17日（日）☼
石神井氷川神社で毎年開催されている「井のいち」に、ちひろ美術館も出展。会場は、クラフト・飲食ブースや、ライブ演奏などで、にぎわいを見せていた。当館は、所蔵品カードを使ったワークショップを実施した。参加者それぞれが、カードの絵をじっくり見て、感じたことや考えたことをことばにしながら楽しむ姿が印象に残った。日中は気温が30度まで上がったが、会場は木陰が多く、心地よく感じられた。地域に根づいた催しとして、幅広い世代の方に親しまれている「井のいち」の魅力を、あらためて実感した一日となった。

風

Vol.16

旬なできごとをピックアップしてお届けします

5月末、キーウ（ウクライナ）で、『ゆきのひのたんじょうび』（至光社）を含む日本の5作品の絵本の贈呈式が開催されました。至光社が、特定非営利活動法人ウクライナ文化センターと取り組んだ「ウクライナ絵本寄贈プロジェクト」*によるもので、現地のラノク社で出版されたウクライナ語版各1,000部、計5,000部の絵本が、学校や小児病院など1,000か所に無償で届けられます。これらの費用は、すべて日本の企業や個人からの支援によって賄われており、今後、避難生活を送るご家族や、困難な状況に置かれた子どもたちの手にも直接届くように、支援を広げる計画が進んでいます。

至光社の武市晴樹社長は、キーウでの贈呈式に「絵本は傷ついた心を癒し、あたたかい想像の世界へ導く力があります」とビデオメッセージを寄せました。絵本の裏表紙には、支援に対する謝辞とともに、「子どもたちの心に平和と希望が届くことを願って」と記されています。

いわさきちひろは、子どものしあわせと平和を願い、生涯、子どもを描き続けました。当財団は、ちひろの業績を記念し、「子どもの幸せと平和」「絵本文化の発展」というふたつの理念を掲げています。

絵本は、ことばや文化、国や民族の違いを超えて楽しめる文化財

ウクライナ語版『ゆきのひのたんじょうび』表紙

です。絵本が対話を導き、平和の種となることを信じて、未来を担う子どもたちが、戦争や暴力にさらされることなく安心して暮らせる世界になることを願って、当財団・美術館は活動を続けていきます。　（武石香）

*詳しくは至光社プレスリリース参照 https://www.shiko-sha.co.jp/news/n126545.html

INFORMATION

●次回展示予定　2026年10月30日(金)～2027年1月31日(日)

没後70年　茂田井武とパリの画家たち
—Paris の破片(カケラ)—

茂田井武（1908-1956）は1930年、21歳の春に世界放浪の旅に出ました。
目指したのは芸術の都・パリ。1920年代から30年代にかけて、パリには世界各地から芸術家たちが集い、独自の作品を生み出していました。本展では当時パリに集った画家たちの作品とともに、３年に渡る欧州滞在中に茂田井が描いた３冊の画帳や、後年旅の記憶をもとに描いた作品などを紹介します。

茂田井武（日本）
アクロバット
1932-33年頃

ちひろ　旅のたのしみ

「絵をかくことの次に旅が好き」と語っていたちひろ。いつも携えていたスケッチブックには、美しい景色や、慌ただしい生活を離れゆっくり向き合った息子の姿など、旅先での感動が記されています。パリが舞台の映画を絵本化した『あかいふうせん』など、各地をその足で歩いた画家ならではの描写がみられる作品も多く残しています。スケッチ、写真、作品を手掛かりに、ちひろの旅の思い出をひもときます。

いわさきちひろ　スキーをする少年　1969年

ちひろ美術館・東京イベント予定

各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。
掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧いただくか、お電話にてお問い合わせください。
TEL.03-3995-0612　chihiro.jp

〈展覧会関連イベント〉

●松本猛ギャラリートーク　※2回とも同じ内容です

○日時：８月２日（日）14：00～／15：00～
○参加費：無料（入館料別）○申し込み：不要
ちひろのひとり息子・松本猛によるギャラリートークです。

●武田美穂ワークショップ「ひみつきち迷路をつくろう！」

○日時：８月９日（日）13：00～16：00
○講師：武田美穂（絵本画家）
○対象：小学生以上　○定員：20名
○申し込み：要事前予約（７/９より公式サイト、TEL. にて）
ダンボールやいろいろな素材を使って、みんなでいっしょに迷路をつくります。詳細は公式サイトをご覧ください。

●高橋真樹講演会　もしも君の町がガザだったら

○日時：10月４日（日）14：00～15：30
○講師：高橋真樹（ノンフィクションライター）
○会場：【ちひろ美術館・東京】
　　定員：40名／参加費：1000円（入館料別）
　　【オンライン】
　　定員：100名／参加費：700円
○申し込み：要事前予約（９/４より公式サイト、TEL. にて）
パレスチナで起きていることが、“遠くの世界の他人事”でなく、私たちにつながる問題であることを伝えます。

●ギャラリートーク

○日時：第１・３土曜日14：00～14：30
○参加費：無料（入館料別）○申し込み：不要

〈会期中のイベント〉

●障がいのある方のための特別鑑賞日

○日時：８月３日（月）10：30～15：30
○参加費：無料（入館料別※18歳以下の方、障害者手帳をご提示の方とその介添えの方は１名まで無料）
○対象：障がいのある方とその介助者、通常の来館に不安を感じている方
○申し込み：要事前予約（７/３より公式サイト、TEL. にて）
障がいのある方や来館に不安のある方が安心して鑑賞できるように、休館日に開催する鑑賞会です。詳細は公式サイトをご覧ください。

●ちひろ忌・アトリエトーク

○日時：８月８日（土）14：00～
○参加費：無料（入館料別）○申し込み：不要

●ナイトミュージアム

○日時：８月22日（土）10：00～20：00
この日は、開館時間を延長して20時まで開館します。特別イベントとして、17時～「ちょっとこわい絵本のじかん」、18時～「すごくこわい絵本のじかん」などを開催予定です。

●開館記念日・たてものツアー

○日時：９月10日（木）11：00～／14：00～
○参加費：無料（入館料別）○定員：各回15名
○申し込み：当日申し込み（10時より受付、先着順）

●出張「子育てのひろば」協力：NPO 法人手をつなご

○日時：９月16日（水）10：00～15：00
○参加費：無料（入館料別）

●敬老の日　9月21日（月・祝）

65歳以上の方は無料でご入館いただけます。

●わらべうたあそび

○日時：10月３日（土）11：00～11：40
○講師：服部雅子（西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰）
○参加費：500円（入館料別）
○対象：０～２歳児と保護者　○定員：10組20名
○申し込み：要事前予約（９/３より公式サイト、TEL. にて）

●絵本のじかん

○日時：第２・４土曜日　11：00～11：30
○参加費：無料（入館料別）○申し込み：不要
協力：NCBN（ねりま子どもと本ネットワーク）

CONTENTS
〈展示紹介〉武田美穂展　絵本づくりはドキドキなのだ！…❷／ちひろ　子どもは平和のシンボル…❸／〈活動報告〉ラチョフと絵本『てぶくろ』の魅力＆ロシア語で味わう民話絵本と、キリル文字の魅力…❹／ひとことふたことみこと／美術館日記／風…❺

美術館だより　NO.229　発行2026年7月10日

ちひろ美術館・東京
〒177-0042　東京都練馬区下石神井 4-7-2　TEL.03-3995-0612　テレホンガイド 03-3995-3001　FAX 03-3995-0680